
裏切りのステーキハウス

木下半太



幻冬舎文庫

裏切りのステークハウス

「お前はミスター・ピンクだ。

ミスター・イエローじゃないんだから感謝しろ」

——映画『レザボア・ドッグス』より

飢えた犬は肉しか信じない

——チエーホフ

まずは、一人の男の伝説から語ろう。

その男の名前は、立浪琢郎^{たつなみたくろう}。昭和三十六年、北海道の港町で誕生した。

あくまでも伝説なので、町の名前は割愛させてもらう。新鮮なカニとホタテとイクラは捕れるが、陸には若者がほとんどいない、寂れた町をイメージしてくればそれでいい。

立浪の母親は、ロシア人の船乗りを相手にする娼婦だった。父親は不明だ。立浪の、雪のように白い肌と青みがかかった瞳から判断すれば、ロシア人であることは間違いない。

そのおかげで、立浪は、日本人離れした強靱^{きょうじん}な肉体を手に入れた。小学校一年生の

時点で、学年のみならず、学校で一番背が高かった。手のつけられない悪ガキで、自分に歯向かう者は絶対に許さず、足腰が立たなくなるまで叩きのめした。

「琢郎ちゃんは、ホッキョクグマよりも恐ろしかったな」

立浪琢郎の同級生だったA氏（現・漁師）は、同窓会でボヤいたという。

「全身の毛を逆立てて、雄叫びを上げながら殴りかかってくるんよ。喧嘩を止めに入った教師の耳を食いちぎったこともあったな。ほら、なんだっけ？ あのプロボクサー？ えつと……そうだ、マイク・タイソンだ。タイソンが対戦者の耳を噛みちぎったことがあったろ？ あのととき、琢郎ちゃんのことを思い出して、思わずテレビを消したもんね。タイソンよりも、オイラは琢郎ちゃんのほうがおっかない。だって、小学生在大人の両耳を食いちぎったんだよ。その耳はどうしたかって？……琢郎ちゃんが食べたんじゃないかな。そんなわけはないと思うけど、オイラの記憶では、それぐらい琢郎ちゃんはおっかなかったのよ」

大人たちも、立浪を避けて通った。鉄パイプを引きずりながら下校する立浪とは、関わり合いたくないからだ。

運命の荒波は、容赦なく立浪に襲いかかる。

立浪が小学三年生のとき、母親の幸子さちこが殺された。犯人は立浪の家の斜め向かいにあった中華料理店の店主だった。

「わしのほうが先に殺されそうになったから、思わず中華包丁で反撃しただけだ」
逮捕当時の店主は、警察の取調べに対して必死に弁明したという。

「たしかに、幸子さんと浮気していたのは謝る。嫁と子供に合わせる顔がない。この北海道の空の上には、ちゃんと神様がおって、わしに天罰を与えたのだろう。その日、いつもどおり、営業中にチャーハンの鍋を振っていたら、出刃包丁を持った幸子さんが店に入ってきたわけだ。ピンときたね。こりゃ、殺されるなって。幸子さん、裸足はだしだったし、鬼婆みたいな形相だったしね。子供連れの客もいたし、こりゃ、戦わなきゃならんなって。無我夢中だったね。幸子さんが油でヌルヌルの床で転ばなかったら、わしは客の誰かが死んでたろうな。床掃除をサボっていたわけじゃない。中華屋の床がどうしてもヌルヌルになるのは仕方ないことなのさ。それが嫌なら他の店に行けばいい」
目撃者の証言もあり、中華料理店の店主は正当防衛を認められた。だが、妻と子供は家を出ていって、客足は遠のき、閉店を余儀なくされ、漁港で帆立貝の殻から身を外す仕事に変わった。

立浪は、母親の葬式で一滴も涙を流さなかった。まるで、他人を見るかのように無表情のまま、母親の死に顔を見つめていたらしい。

母親の死をきっかけに、立浪琢郎の悪童ぶりは加速する。

小学四年生で酒とタバコを覚え、小学五年生で女を覚え、小学六年生で地元のヤクザを半殺しにした。

「まあ、正直言つて、ガキだと思つてナメてかかっていたわな」

小学六年生だった立浪にウォッカの瓶で頭をカチ割られたヤクザは、入院先のベッドの上で、悟りきつた表情で語つたという。

「よくよく考えたら、あのガキは身長が百七十五センチで体重が八十キロあつたんだから、大人と何ら変わらないわな。ウチの組のシマを荒らす奴がいると聞いて、どこのどいつかと思つたら、小学生のガキだつて言うじゃねえか。ふつう、誰だつて油断するだろう。その話を聞いたとき、俺はてつきり、夕チの悪い冗談かと思つたぜ。だつてよお、ロシアン・マフィアからトカレフを仕入れて売りさばいているガキだぜ？ 漫画の世界でもありえないだろうよ。大人のワルの世界に憧れて精一杯背伸びしているんだろ、くらいにしかなわないだろ。ナイフでもチラつかせれば、小便ちびつて泣

いて謝るだろうと思うだろ。まあ、俺が甘かったってことよ。いきなり、ラツパ飲みしていたウォッカの瓶でガツンだぜ。殴られたことよりも、十二歳のガキが、あんなに強い酒を顔色変えずに飲んでいたことに驚いたわな」

立浪琢郎は大物になる。

そんな噂が、瞬く間に港町から北海道全域、そして、全国のアウトロー業界へと広がっていった。

小学校を卒業する頃（六年生のときは、一年間で三日しか登校しなかったが、教師たちが報復を恐れて卒業証書を渡した）には、暴力団と相撲部屋とプロレス団体のスカウトが、立浪の元を訪れた。

立浪が選んだのは相撲だった。十三歳で故郷を捨て、東京の墨田区にある相撲部屋に引越すことになる。

余談ではあるが、立浪が上京した翌日の漁港で、立浪の母親を刺した元中華料理店の店主が水死体となって発見された。

遺体はトカレフで胸を撃ち抜かれ、帆立貝の殻を剥く器具で両目をくりぬかれていた。犯人は未だに捕まっていないが、地元の住民たちは、「こんな悪魔のような真似

ができるのは一人しかおらん」と、口を揃えて呟いたという。誰一人、立浪琢郎の名前は挙げなかったが。

それから二年後、立浪が稽古を積んでいた相撲部屋で事件が起こる。親方が夜中、寢室で暴漢に襲われたのだ。両手両足を特殊なプラスチックのベルトで縛られ、現金や女将おかみの宝石類を奪われた。犯人は逃走し、警察の懸命の捜査も空振りに終わる。

「ここだけの話、あれは強盗じゃねえな」

当時の捜査を担当した刑事が、のちにスナックのカウンターで酔った勢いで同僚に愚痴ったという。

「だって、親方が犯されてたんだぜ。女将じゃなくて親方のほうだ。盗人ぬすこが、わざわざそんな真似をすると思うか。盗られた現金の額もあやふやで怪しかっただろ？ 宝石が近所の空き地であっさり見つかったのも不自然すぎる。俺の推理では、親方に恨みを持っている奴の犯行だ。縛られた女将の前で、見せつけるようにして親方をレイプしたのさ。わかってるよ。体重百二十キロの親方を手込めにするなんて、並の人間にできることじゃない。おそらく、親方に散々「かわいがられた」力士の復讐だろう。親方が強盗の一点張り証言していたのは、犯されている姿を写真か映像に撮ら

れたからかもしれんな。俺は、あの立浪琢郎というガキが犯人じゃないかと睨にらんでい
る。そうさ。まだ、十五歳のガキだ。でもな、目を見ればわかる。あれは、いづれ怪
物になるぞ」

事件から半年後、立浪琢郎は相撲部屋を辞めた。理由は定かではない。親方や女将
さんは、一切引き止めなかった。

この頃の立浪は身長百八十六センチ。体重は九十五キロ。体格を生かして、六本木
のディスコの黒服兼用心棒になり、金を貯ためだした。そこで知り合ったのは、裏社会
で根を張る、ひと癖もふた癖もある連中だった。

ここは、港町よりも相撲部屋よりも居心地が良かった。周りの人間たちが、立浪の
凶暴性を必要としてくれたからだ。

立浪は三年間、六本木のディスコやクラブを転々としたあと、仲間と新しい商売を
はじめることになる。

貯め込んだ金で西麻布の高級マンションの一室を借り、会員制の雀荘を開いた。仲
間の二人は三十代と四十代だが、実質のリーダーは立浪だった。腕うでつぶしが強く、頭
がキレ、何よりもクソ度胸がある。

シマを牛耳っている暴力団には、みかじめ料を払い、適度な距離を保ちつつ良好な関係を築き上げた。

暴力団たちは、ドラフト一位の即戦力として立浪を組織に招こうとしたが、本人は頑かたくなに断つた。高級車、高級マンション、将来の幹部候補などの好条件を並べられても、まったくなびかないせいで、立浪はさらにカリスマ性を高めていった。

立浪たちは、徐々に商売の手を広げた。会員制の雀荘やクラブや風俗店を次々と作っていく。

商売敵がたきたちを潰す必要はなかった。みんな、立浪を恐れて勝手に去っていくからだ。中には、立浪の生きざまに惚ほれ、無償で自分の店舗を明け渡す奴も出てきたほどだ。たまに、立浪を倒そうとする連中が現れたが、必ず返り討ちに遭った。ただし、立浪が直接手を下すことはない。連中の家や店が、原因不明の火事や爆発を起こすのである。立浪は、ビルを丸々吹き飛ばすほどの火薬をどこかに隠し持っているという噂まであった。

バブル景気に入り、立浪の商売は軌道に乗った。唸うなるほどの金が転がり込み、界限かいわいのアウトローたちの間では、立浪の名は早くも伝説となりつつあった。

立浪は浮かれることなく、次の手に打って出る。

仲間たちから離れて独立し、飲食店専門の経営コンサルティング会社を立ち上げたのだ。

立浪には先見の明があった。まず、西麻布に乱立していた自分の店の権利を、独立する際に、仲間二人に手頃な値段で売った。その中には、全国的に有名な巨大ディスクも含まれていた。

「琢郎が、とうとうイカれたのかと思ったよ」

立浪のビジネスパートナーだったB氏（現・タクシー運転手）は、懐かしさに目を細めながら、あの時代を回想したという。

「商売の絶頂期にありながら、突然、個人で小さな会社を作るって言い出したんだからな。信じられるか？ 望むものは何でも手に入ったんだぞ。金や女は当たり前。王様のような暮らしをしていたのに、だ。まさか、その数年後にバブルが弾^{はじ}けて、俺たちが破産するなんて夢にも思っていなかったからな。琢郎は手堅かった。引き際をわかっていたんだな。不景気に入ってから手がけたのが、ラーメン屋だ。今のラーメンブームを作ったのは琢郎と言ってもいい。あんなにド派手なディスクをやりながら、

ラーメンのことを考えていたわけだ。アイツの真の恐ろしさは凶暴性ではなく、揺るがない冷静さだよ。絶対に敵に回してはいけない男だ。もし、琢郎と仕事をするときには、やってはいけないことが二つある。それは――」

1

「嘘をつくな。そして、裏切るな」

私の目の前に座っている立浪琢郎が、低く通る声で、ゆっくりと言った。

剃刀かみそりのような視線で私を見ている。薄くなった髪を丁寧なに撫なでつけ、五代とは思えない肌艶は、亡霊みたいに白く輝いていた。年齢を感じさせないのは、顔つきのせいだけではない。首の筋肉、肩幅の広さ、胸板の厚み。ジムで鍛えたその肉体は、元力士というより、プロレスラーのそれだった。

現在の時刻は午前零時。西麻布の飲食ビルの五階にある、会員制のステーキハウス『テキサス』。閉店後で他の客はいない。BGMにエリック・クラプトンが流れている。今、かかっている曲は『アイ・ショット・ザ・シエリフ』だ。

ここは、私の店である。ずっと夢だった、私の城だ。四年前、立浪の融資を受けて、オープンさせた。いわゆる高級なステーキハウスだが、バブル時代の店のようないキがあった高級感の押し売りはしない。店名の『テキサス』からわかるように、内装もサーブिसも、時代に合わせた庶民性を取り入れている。

木のぬくもりを感じさせるカウンターと椅子。照明は暗すぎず明るすぎず、打ちっぱなしのコンクリートの壁は冷たさを感じるので、私好みの七〇年代から八〇年代のロックアーティストのレコードジャケットを飾っている。

店の説明をしている場合ではない。今、私は人生最大のピンチに直面しているとこゝろなのだ。

「俺を裏切ったな」

立浪が、さらに低い声で言った。みぞおちまでビリビリと響く迫力がある。

私は両手を胸の前に上げて答えた。

「う……裏切るわけがないですよ」

恐怖のあまり、声が擦かすられてしまう。

なぜなら、生まれて初めて本物の銃を突きつけられているからだ。立浪の右手に握

られている銃は、カウンター越しに私の眉間みげんを狙っていた。

なぜ、本物の銃だとわかるのか。精巧なモデルガンを使ったイタズラではないと、判断できるのか。

私はある事情で、この銃を触ったことがあるからだ。場所は立浪の自宅の寝室だ。本人はいなかった。私に銃を触らせたのは、鏡子きょうこという女だ。

スピーカーから流れてくるエリック・クラプトンが「保安官を撃った」と歌っている。銃を突きつけられながら聴くには、やや刺激の強い曲である。

私は必死で頭を回転させた。

なぜ、つい最近まで私を可愛がってくれていた立浪が、怒りの形相で銃を構えているのだろう。先週の日曜日は、『テキサス』の常連たちと一緒に、多摩川でバーベキューをしたではないか。その日の立浪は、シャンパンの瓶を片手に終始ご機嫌だった。私と肩を組んで写真を撮ったときなどは、ふざけて頬にキスマスまでしてきたのに……。

立浪の伝説は耳にタコができるほど、常連客たちから聞かされていた。でも、この五年間、立浪がキレたところを見たことがない。外見は鬼と熊が合体したようないかつきではあるが、いつも穏やかな笑顔で軽口を叩き、お茶目な一面さえ持ち合わせて

いる。

……これはドッキリなのか？

いや、イタズラにしては、ハード過ぎる。誰も笑えないだろう。それに、立浪は酔っているわけでもなく、完全なシラフだ。

「私がおかしかったですか」

まったく身に覚えはないが、確認したほうがいい。知らないところで他人を怒らせるというのは、たまにあることだ。とりあえず、誠意を込めて謝罪して、物騒なものを下ろしてもらおう。

「とぼけるのか」

立浪が鼻で笑った。

「教えてください。どうして、立浪さんが怒ってらっしゃるかわからないのです」

「鏡子と寝ただろう」

立浪鏡子——。立浪が溺愛している妻である。

鏡子は、私よりも年下ではあるが、私を可愛がってくれ、色んなお客さんを連れて店に来ていた。ちなみに、彼女はステーキよりもアワビの鉄板焼きを好む。

店内BGMが、エリック・クラブトンから変わった。

悲しげなピアノのイントロと口笛が流れたあと、アップテンポのギターリフが入る。ビリー・ジョエルの『ストレンジジャー』だ。

スピーカーから流れてくるビリー・ジョエルが、『僕らはみんな秘密の顔を持っている』と歌いだす。

この状況では聴きたくない曲である。

「夜は長い。真実をすべて話してもらうからな」

立浪が微笑ほほえんだ。だが、目は笑っていない。怒りの炎が燃え盛っている。

私と立浪の間には鉄板がある。黒毛和牛のシャトーブリアン・フィレステーキが肉汁をジュウジュウいわせて焼かれていた。

2

かくいう私の名前は久慈良彦くじよしひこ、四十一歳。伝説の男にはほど遠い、どこにでもいるような小市民だ。